



事例1

## 1年・ラウンド2(音と文字の一致)

横浜市立南高等学校附属中学校 授業者: 山本丁友先生

使用教材: 『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE』1(光村図書) Unit 6

リラックスした雰囲気の中、ウォームアップの会話がスタート。“How are you today? Hungry? Sleepy?” “Who is sleepy?(眠い人はいるかな?)” 先生からの問いかけに、数名が挙手。“What time did you go to bed?(何時に就寝したの?)”と尋ねると、生徒の一人が“10 o'clock.”と大きな声で答えた。“After 10 o'clock?(10時以降の人はいる?)”先生が教室を見渡すと、今度は一人の女子生徒が控えめな口調で答えた。“12 o'clock.”その回答に、山本先生は“Oh! You are like Cinderella!! (まるでシンデレラだね)”生徒は一斉に笑いだし、教室はさらに和やかな空気に包まれた。

### 英語ができないと思わせない

「間違いを恐れずに話すためには、授業の中での安心感が大切」と語るのは、山本丁友先生。特に1年生の授業では、英語ができないと思わせないように、細かい間違いをあまり指摘しないように心がけているとのこと。同校は、2012年の開校当時より、「英語を自分の言葉として、のびのび表現できる生徒を育てる」という目標



安心して発言できる雰囲気ができあがっている、山本先生の授業。

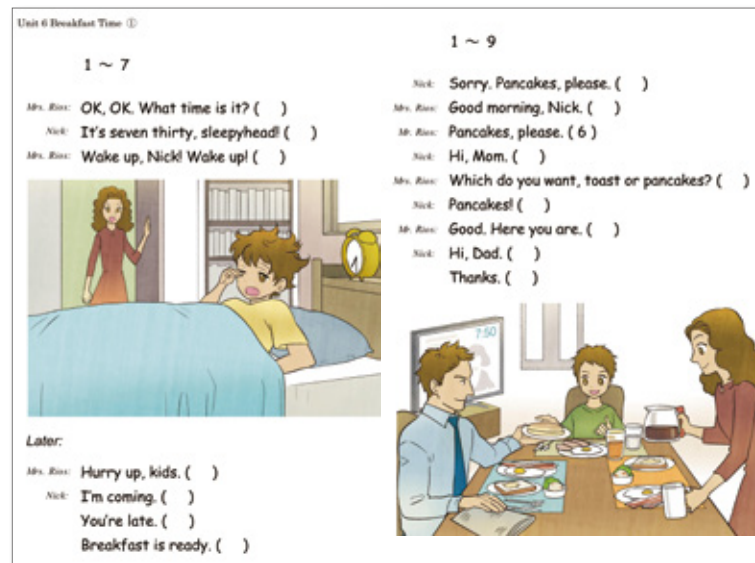
のもと、英語教育に取り組んできた。その目標を実現するための手立てとして考え出されたのがラウンドシステムだ。

### 飽きさせないで何度も聴かせる

十分なウォームアップのあと、教科書Unit 6の活動に入る。生徒がUnit 6の内容に触れるのは、ラウンド1以来約2か月ぶりのこと。“Do you remember the story of Unit 6?(Unit 6のストーリーを覚えているかな)”先生がUnit 6の扉の写真を見せながら問いかけると、生徒たちは、ほんの一瞬の間のこと、「寝ぼうした話じゃない?」「パンケーキ!」など次々に発言しはじめた。

生徒はストーリーをよく覚えているようだが、実は和訳をしたことはない。2か月前のラウンド1で取り組んだのは、リスニングのみによる内容理解。CDを聴いて、教科書のイラストをストーリー順に並べ替えるという活動だ。使用している教科書(『COLUMBUS 21』)は、全体が一つのストーリーになっているので、話の展開を捉えやすい。

本時は、ラウンド1でおおまかに理解したストーリーの「音と文字の一致」を行う。生徒は、教科書本文が順不同に並んでいるワークシート(※1)を見ながらCDを聴く。そして聞こえた順に番号をつける。全員が番号をつけられるまでには、CDを3~4回聴かせる必要がある。飽きさせないコツは、CDを1回流すたびに、生徒たちに適切な声をかけることだ。初めは、「難しくて当然」「少しずつ埋めていこう」など、生徒



※1 教科書本文が順不同に並んでいるワークシート

を安心させて学習に向かわせる言葉、あともう一步というところで、“One more chance!”, 全員が聴き取れたあたりで、少しあおるように“Final chance!!”と投げかける。

そして、ペアで番号を確認し合ったあと、教科書を開いて、確認の意味でもう一度CDを聴く。この日は、Unit 6全文を計4回、全員が集中して聴くことができた。

### ラウンドシステムは、スローラーナーにやさしい

ラウンドシステム実施初年度から同校に勤務する梶ヶ谷朋恵先生はこう語る。「ラウンドシステムは、やみくもに活動を繰り返すのではなく、言語習得理論に基づいた目的と意図をもって行っています。1のアウトプットには100のインプットが必要。アウトプットを急がせないで、まずは十分に音を聴かせる。正しさよりも、英語の自然な流れを先に身につけるのが、この学習法の特徴です」。

ラウンドシステムは、これまでにない学習法



授業中、笑顔が絶えない山本丁友先生。

【特集】  
ラウンドシステムで  
学力が大幅アップ!

なので難しいのかといえば、生徒にとっては全く逆だという。話したり書いたりさせる前に、これだけたくさん音声を聴かせるのは、むしろ手厚いといえる。「スローラーナーにやさしいんですよ」と梶ヶ谷先生は語る。実施8年目の今では自信をもってそう言えるが、最初は、この新しい学習法に心配もあったそう。しかし、開始から半年が過ぎたころ、生徒の様子を見て、「これでいいんだ」と確信したという。「私のこれまでの勤務経験の中で、どんなに英語が得意な子でも、ここまで積極的に話したり書いたりする姿は見たことがありませんでした。また、発音のよさには舌を巻きました」。当時の驚きは今でも鮮明に思い出せるようで、先生の言葉には熱がこもる。

ラウンドシステムは4技能をバランスよく育成することができるが、なかでも「話す」「書く」力の育成において、これまでの英語教育にはみられなかった成果を出しているという。この斬新ともいえる学習法が、これからの英語教育を変えていくのではないだろうか。